障碍者が輝く場所

雲雀丘学園高等学校　二年　安田　春花

「働けることが幸せ」と母は語った。母には障碍があり、障碍者が集まって働く施設で働いている。社会の目には映りにくい、障碍者が働く現場での実情を知ることで、私たちはどれほどの誤解をしているのかを、母の体験が鮮やかに示してくれた。

母は脳性麻痺で歩行が難しく常にすり足で歩いており、言葉も話しづらいため、一般企業への就職は難しいということだった。しかし、母はずっと働きたいと言い続けていた。

皆さんは、障碍者の労働についてどのようなイメージを持っているだろうか。一般的には、働くことが難しいというイメージがあるのではないだろうか。実際、一般企業の就職で失敗してしまったという人は少なくない。また、一般企業で働いていたが、精神を病んでしまい離職する人もいる。そんな人々の居場所となるのが就労支援施設である。就労支援施設は、障碍のある人が働く場所で、自身の特性、今後の目標によって支援の形式が変わり、母はその中の一つ「就労継続

支援Ａ型」の事務所で働いている。この形式は、一般企業と近い形式で、事務所と雇用契約を結ぶ。母の職場では、身体障碍者だけでなく、精神障碍者も一緒に働いている。また、世代も広く、二十代から母のような世代まで働いている。世代が違っても仲が良く、仕事終わりにお茶に行った話もよく聞いていた。

母は、このような施設のメリットは理解があるところだと言っていた。それぞれの特性を理解しあうことで、互いに思いやりの心をもって働くことができる。得意なところを伸ばし、不得意なところは仲間と補っていく。そうして協力しながら生き生きと働けるそうだ。母は、ここで働き、仲間とともに楽しく働くことで徐々に自分が必要とされる人間になっていっている気がして、自分に自信がつくと語ってくれた。これを聞いて私は驚いた。働いていると多くの場合、「面倒くさい、働きたくない」と思うことが多いと思っていた。そうは思わないのかと尋ねると、「もちろんそう思うときもあるし、人間関係がうまくいかないときもある。接し方が難しい人もいて、世代の違いもあることからコミュニケーション

がうまく取れず、悩むことも多かった。しかし、それでも家の外に出て働くことは楽しいし、自分が一番輝ける場所だと思う。」と笑っていた。確かに、仲間のみんなでカラオケに行ったりした話をする母の姿は、以前よりも生き生きとしていて楽しそうな様子だった。

このように、今日の就労支援施設には様々な形式があり、それぞれの特性、目標に合わせた形式が提供されている。私は母の話を聞いて、「働くこと」が少し楽しみに思えた。母のように、誰もが働くことによって笑顔が生まれる社会になっていくことを私は望んでいる。